

もし彼が、最高の料理人なら

cocoratte

料理人と銀行家

料理はケルヴィンに任せているが、
もし彼が最高の料理人なら、最高の料理を作るはず。

彼は健啖家であった。いつも朝には、専属の料理人が、
カリカリに焼いたベーコンエッグを作る。そして60代近い年齢で
あるにもかかわらず、彼 銀行家のアラン・マーチャント は、
綺麗に平らげる。ベーコンエッグ、濃いブラックコーヒー、クロワッサンと山羊のチーズ。
そして、ケルヴィンが作るサラダ料理！

それこそが彼の健啖の秘訣であった。ところが、ある日、
専属の主任料理人、マーガレット・シティファが青い顔をして、朝方、彼にこういった。
「申し訳ございません。マスター。母がさきほど、病で倒れたので、私は、休暇をいただかなくては」
田舎まで、見舞いに行くのだという。アランはケチだが、人情家でもある。
快く了承した。可哀想なシティファが鉄砲玉のように飛び出していく。
仕事と家庭のことを考えながら。
もっとも、アランたちにとっては、肝心の料理が作れなくなった。どうするか？

アラン・マーチャントは当然、サラダ担当の料理人、ケルヴィンに代替役を頼んだ。
彼が最も信頼する男に。
「君なら、当然出来るだろ？」答えはいうまでもなかった。
ケルヴィンはにこやかにほほ笑むと、ハムエッグとトーストを温め、
さらにそれにワインのビネガーとサラダをたっぷり挟んだ、サンドイッチを作った。時刻は昼ごろ。

これが最初の食事だ。

もちろん結果はいうまでもない。銀行家の、豪華なマンションのダイニングの、あちこちにケルヴィンの
料理が、くわわっていく。焼いた羊肉のロースト。グーラッシュ。カツレツ。こんがり焼いたチキンを
詰め込んだ、丸パンはかりかりとさらに焦げる寸前まで焼かれたが、それもなかの脂肪とともに、見事な料
理となる。

そして、サラダ。新鮮な野菜のサラダ。

そして、驚くべきことにケルヴィンの料理はどれも素晴らしかったのである！ 使用人や小間使いたちを
礼儀正しく扱い、その見事な料理をディナーまで作り続けたのである。

土曜日は休みだ。夕食が終ったあと、アランはケルヴィンにいった。ワインを味わいながら、

「君はなぜ？ もっと働かんのだ？ 彼女、つまり、マーガレットに匹敵する腕だと思っぞ。それとも、

マーガレット・シティファのクビが、かかっているからか？」銀行家が疑問をのべる。

「私の料理は一度きりのもの。確かに素晴らしいかも知れませんが、健気なマーガレットの料理も素晴らしい」答える。

「わたしは、旦那様のために、最高のサラダを作り続けることが生き甲斐なのです」微笑む。お互いにワインを飲みながら。

「それに、ベーコンエッグをカリカリに焼くのは、マーガレットのほうが上手い」笑う。

「なるほど。それは困ったな。わたしが好きなあのベーコンエッグはマーガレット産なわけか？」情景が浮かんだらしい。微笑む。

そして、それから。

「一つ間違えていることがある。お互いにだ」銀行家が笑う。心地よいサマーワインの酔いととも。マーガレットをクビにしない。そして、アランとケルヴィンは尊敬する友人なのである。